

著者	信時裕子
タイトル	信時潔旧蔵 ピアノ・オルガンの来歴と修復の概要
掲載書(誌)等	『望雲』第6巻第3号
発行所	慶應義塾横浜初等部
年月(日)	2019.03
備考	(非売品)

<https://nobutoki.com/plugin/databases/detail/26/57/709#frame-57>

注： PDF は著者最終版 (掲載写真略)

信時潔旧蔵ピアノ・オルガンの来歴と修復の概要

信時 裕子

(東京音楽大学付属図書館司書・
日本音楽学会会員)

ご縁あって慶應義塾横浜初等部に、祖父・信時潔旧蔵のピアノとオルガンが寄贈され、修復の後ご活用いただく運びとなった。ご尽力下さった皆様に、遺族の一人として御礼申し上げます。

作曲家・信時潔と聞いて、直ぐにわかる方は、今や多くはないかもしれないが、慶應義塾では「見よ風に鳴る」で始まる「塾歌」の作曲家といえはわかっていただけたらだろうか。

作曲家・信時潔略歴

明治二〇年、大阪生まれ。父は大阪北教会の牧師だった。幼少期より教会音楽に親しむ。東京音楽学校(現・東京芸術大学音楽学部)本科器楽部でチェロを専攻。のち作曲部に進む。研究科修了後、母校で教鞭をとる。大正九年から二年間ドイツ留学。ゲオルク・シューマンに作曲を学ぶ。帰国後、教授となる。母校で合唱曲「あかがり」「深山には」など

が初演された。昭和初期の文部省唱歌の編纂に携わり「一番星みつけた」「電車ごっこ」などを作曲。管絃楽部では主席チェロ奏者を務めた。本科作曲部の創設に尽力。昭和七年、教授を辞して講師となり、以後は作曲に力を注ぎ、歌曲「鶯の卵より」「沙羅」、ピアノ曲「木の葉集」、合唱曲「紀の国の歌」などを発表。昭和十二年、「海ゆかば」、十五年、交声曲「海道東征」を作曲。作曲の円熟期が、戦時期に重なったことは、昭和末年まで、作曲家の評価、作品の評価に、大きな影響を与えた。

戦後は、歌曲「古歌二十五首」、新憲法施行記念国民歌「われらの日本」などを作曲。主要作品を収めた信時潔『独唱曲集』『合唱曲集』『ピアノ曲集』(春秋社刊)が出版された。

多くの校歌・社歌・団体歌の作曲依頼を受け、その数は千曲以上にのぼる。

日本芸術院会員。三十八年、文化功労者。三十九年、勲三等旭日中綬章叙勲。四〇年、東京・国分寺市で死去。

信時潔が弾いたピアノ

ピアノに向かっているかなり晩年の写真が残っていた。奥の雨戸が閉まっている。大

正末年に建てられた木造住宅で床は畳敷き。裸電球。ピアノの上は楽譜が山積みである。「うまい」と言える腕前ではなかったが、弾くことは好きだった。ピアノの背側にあるガラス戸棚には、ドイツ留学中に入手した楽譜がぎっしりと詰め込まれていて、そこから楽譜を取り出しては、片端から一管弦楽でもオペラでも一ピアノで弾いていた。写真は、おそらくカメラマンの要請で、作曲をしているポーズを取っているのだが、鍵盤の間に置かれた消しゴムが、いつもそうしていた感じを醸し出す。

「写真略」

スタインウェイ製アップライトピアノ

以下、ピアノに関する詳細な情報は、今回修復を担当された太田垣至氏によるものである。スタインウェイ製のアップライトピアノで、「アップライト グランド ストリング フレーム」という、グランドピアノ型に近い鉄骨が用いられている。楽器のサイズも大きく、平均的なアップライトピアノが二百五十キロ前後なのに対して、約三百四十キロある。更に、弦を押さえる「カポダストロバール」が用いられていること、鍵盤の蓋に

STEINWAY & SONS と並列して Sherman, Clay & Co. と記されていること、などの特徴から、Model-I(ニューヨーク製という型番であると考えられる。シャーマン・クレイ社は、一八五三年にサンフランシスコに設立され、二〇一三年まで存続した由緒ある楽器店で、スタインウェイの代理店でもあった。

このピアノを入手したのは、昭和十五年六月。ちょうど塾歌を作曲・推敲していた頃である。清野主(きよの・つかさ)氏からのプレゼントで、中古品だったことがわかつている。『米国日系人百年史』によれば、清野氏は、アラバマ州でツバキ・ツツジなどの栽培に成功した。個人的にどんな繋がりがあったのかわからないが、清野氏は大阪で幼少期を過ごしたらしい。今回の調査で、鉄骨フレームの製造番号から一九〇五(明治三十八)年製であることが特定できた。シャーマン・クレイ社関係の楽器店で販売され、製造から三十年以上を経たピアノが、海を渡って日本に到着したのだろう。物には殆ど執着がない信時だったが、このピアノはかなり気に入って、家族にも自慢してた。

歴史的ピアノの修復

太田垣氏は、チェンバロやフォルテピアノの修復・製作が専門で、これまでに浜松市楽器博物館の楽器などを修復、管理されている。修復前のピアノは、鍵盤やアクションの動きが鈍く、鍵盤の重さは通常の二倍以上もあり、快適な演奏は難しい状態であった。フェルト部品、皮革部品などに酷く劣化が見られ、アクションのオーバーホールが必要だった。一般的な修復、すなわちピアノという楽器が、もつともよい音を出すための修復というだけでなく、作曲家信時潔の遺産、歴史的資料として、どこまでオリジナルな状態を残すか、注意深く検討された。旧来の部品の素材に近いものを厳選して使用するため、フェルトは楽器修復家G・ウオーカー氏による百パーセントピュアウール、皮革類は革鞣し職人P・ケンドルバツヒヤール氏による鹿革を用いた。また、ハンマーに残る弦の跡は「信時潔の痕跡」ととらえ、削らずに残したという。

リードオルガン

オルガンは、ヤマハ製リードオルガン。潔の妻ミイが使っていた。ミイは、大正四年に東京音楽学校甲種師範科を卒業後、熊谷女学校の教師をしていたが、信時が留学から帰ってから結婚。四人の子供を育て、家庭を切り

盛りしながら、潔の作品の清書や、作品の整理も行った。今回の修復は、幼稚舎から大学まで義塾で学ばれ、近年はリードオルガンの修復、復興に尽くされている伊藤信夫氏が担当された。

おわりに

昨年六月に開催された、信時潔旧蔵ピアノ修復記念コンサートでは、地域の皆様、横浜初等部の生徒、保護者、関係教職員の皆様が、修復された楽器によるゆかりの曲の演奏を熱心に聴き入っておられた。

多くの校歌の中で「慶應義塾塾歌」は、完成度の高い歌の一つだ思う。歌詞も素晴らしいが、慶應ワグネル・ソサイエティー合唱団という、優秀な歌い手たちを得て、作曲に熱が入ったことが大きい。

これから上級校に進む横浜初等部の生徒たちが、いつか「塾歌」の作曲者の名前と、初等部の音楽室で、講堂で、接したピアノ、オルガンとつながりを思い出してくれることに期待したい。その日のために、今、そつと種を仕込んでいるような気持ちである。そこに介在するのは、幸運なことに音楽なのである。